

# ジム・バゴット著 『原子爆弾 1938～1950年』

——いかに物理学者たちは、世界を残虐と恐怖へ導いていったか？——

永川とも子



二〇一五年に発表されたジム・バゴット著『原子爆弾 1938～1950年』（原題：『The First War of Physics: The Secret History of the Atom Bomb 1939-1949』）は、人類史上初の「物理学戦争」こと、核開発を巡る物理学者たちの心象風景、また彼らを取り巻いていた陰謀やスパイ作戦、米ソの核開発競争やキューバ危機等、複雑極まりない時の政治状況を描いた一大「大河ドラマ」である。本書に關し興味深いのは、「サイエンスライター」である著者が、原子力と原爆のメカニズムを科学的観点から詳細に追う一方、物語の主軸に据えられているのは、原爆という破壊兵器を巡り、人々の「恐怖」が如何にして生まれ、増殖し、伝染していったのかという人文学的テーマであるという点だ。本小論では、このテーマを手がかりとし、ポストヒロシマ・ナガサキ、とりわけ、一九三〇年代後半～一九五〇年代初頭という時代の枠組みにおける欧米の歴史的・社会的コンテキストの中で、Nuclear Fear（核の恐怖）が種々

の物語・言説とどう接続し、現在に至るのかという点を確認した上で、欧米における原爆についての文脈・言説空間の中で、本書がどの様に位置づけられるのかという点について考えてみたい。

ヒロシマ・ナガサキ以後、欧米の言説空間では、核を「恐怖」と結びつける文脈が流布し、それはポスト・モダンズムを経て、後世に受け継がれてきた。二〇世紀初頭、H・G・ウェルズによって提唱された空想的なアイデアでしかなかった核戦争という概念が、人々によって営まれていた日常と密接に結びついた「物語」として一般レベルで浸透したのは、ハリ・トルーマンによる原爆投下第一報をもつてのことだ<sup>⑤</sup>。この物語は、原爆投下第一報から数年後の一九四〇年代後半においてさらに深く恐怖の根を下ろすこととなる。核を恐怖と結びつけるという図式は、一九四〇年代後半から加速化した米ソ間の核軍備競争によって深刻化すると同時に<sup>⑥</sup>、核のアイコンは、小説・映画を始めとする大衆文化を通じ拡散していった。例えばロバート・ジェイコブスは、歴史学者ジョン・キヤナデイの「核兵器が有効なのは、人々が核兵器について話すからであり、その話から恐怖が生まれるからであり、人々の行動がそうした恐怖に影響されるからである」という記述を引用し、核のアイコンが人々の恐怖と連鎖反応を起こし、終末の物語として演出され、流布していった過程を学術横断的観点から追っている<sup>⑦</sup>。

ここで私たちは、核がこのような終末論的文脈と結びつけられていった以前の時代的コンテクストに立ち戻ってみる必要がある。核を巡る歴史において重要な位置を占めるのが、本書の序章のタイトルともなっている通り、一九三八年のクリスマススの出来事である。この日、オーストリアのユダヤ系物理学者、リーゼ・

マイトナーとその甥オットー・フリッシュによってウラン核分裂が発見されたことは、歴史的な大事件であることは間違いないが、言説レベルにおいては、これに先立ち一九二〇年代後半には既に、人類史に光を当てる新たなエネルギーの可能性として、原子力は「希望」の文脈と共に語られていた。例えば「ニューヨークタイムズ」一九二一年九月二一日号には、新たなエネルギーの開発可能性について報じた記事が掲載されており、科学が「原子」の力を使った未知なるエネルギーの開発に成功すれば、人類は神の領域へ到達するであろうことが示唆されている。二〇世紀前半における二〇年あまりの間で、「核」を巡る希望の物語が終末の物語へと変貌を遂げた背景には何があったのか。この物語には如何なる関係者が存在し、ひいては、「破壊兵器としての原爆製造」という禁断の道へ、如何なる道筋を経て私たちは導かれていったのか。これらは先行研究においてもなされてきた重要な問題提起であるが、バゴットは一九八〇年代に機密解除された米国公文書、さらには、英国、旧ソ連、ドイツ関与の膨大な一次資料を包括的に参照することで、この変貌の過程を明らかにしている。そこで明確にされているのが、序文において「ヒトラーのナチス・ドイツが原子爆弾を真つ先に製造するのではないかとこの恐怖が第二次世界大戦中、英米の奮闘努力の引き金になった。アメリカが初の核攻撃をしそうだという恐怖が、それに続く冷戦時に旧ソ連独自の核開発計画を引き起こした」と述べられているように、一九三八〜一九五〇年代初頭におけるアメリカ・旧ソ連・英国のコンテクストにおいて、原爆は常に人々の猜疑心と不安と疑惑に彩られた恐怖の物語を提供する存在であり続けたという点だ。さらに

この物語の中では、核戦争という虚構が現実のものとして身の上下に降りかかった際、如何にして生き残るか、核戦争勃発の不安とどう戦うべきか、という点に焦点が置かれている為、ヒロシマ・ナガサキの被爆者の物語は組み込まれないし、ましてや原爆による死者の声は不在である。

ポスト・モダン・リズムの米文学を代表する文学者の一人であるトマス・ピンチオンは、一九六六年に「競売ナンバー49の叫び」という難解な作品を世に残している。この物語の主人公は、「どこにでもいる凡庸な」という形容がふさわしい主婦だ。彼女はふとしたきっかけから、元恋人の遺産相続執行人となり、その続きを遂行する内に、通常の郵便システムでは目にしない奇妙な「切手」の存在を知ることとなる。この切手流通の背後に、国家機密に係していると思われる重大な組織の存在を知ることになるのだが、当の組織が本当に存在するのか、それとも、組織の存在は彼女自身の思い違いであり、存在すらないのか、それを知る術を知らぬまま、エディバは猜疑と不安に満ちた日々を送ることとなり、次第には、彼女の身の回りのもの全てが、組織と関連するもののように見えてきてしまう。本作には、Nuclear Fear という概念は直接的に示されていない上に、核の文脈を本作に読み込むことは少し強引かもしれない。ただ、物語全体を貫く未知なる「組織」の存在、またその存在の不確実性に絶えず心をかき乱され疑心暗鬼に陥る主人公である主婦の表象は、ポストヒロシマ・ナガサキ以後の欧米、特に米国の文脈において原爆が語られる際の典型的な社会的反応とかなりの部分で重なる部分があるように思えてならない。パラノイア・疑心暗鬼・妄想というモチーフを使用

するという物語の「型」は、核を巡る欧米のコンテクストにおいては支配性を持っている。この铸型の背後には必ず、「核は人知を超えた存在である」といったように、核兵器の発生と存在を人間の手とは切り離れた場所に見据えている。こうした物語の大量生産は、冷戦期においてとりわけ顕著に行われたが、根本的な物語の「型」はその後もさほど変化してはいないという印象だ。

それでは、ポストヒロシマ・ナガサキにおけるこうした欧米の核を巡る支配的文脈を視野に入れたところで、バゴットによる本書はどう位置づけが可能だろうか。結論から言えば本作は、欧米のコンテクストにおいて大量に放出された支配的物語とは異なった性質と可能性を持っているのではないかと私は考える。核を巡る支配的物語において原爆は、人の力を超越した、得体のしれない存在として認識されており、この認識に基づき、恐怖は生み出され、増殖し、次々と伝染してきた。この物語は特に新聞・雑誌・テレビ・映画、あるいは教会の説教といったあらゆるメディア媒体を通じ、市井の人々へと伝えられていった。バゴットが描く物語が原爆を巡る従来の物語と一線を画するとすれば、それは原爆、あるいは原子力を、驚異的な恐ろしい神の力としてただ畏怖するのではなく、あくまで「人間が作ったものであり」、恐怖は人間によつて生み出されたのだという前提を決して崩していないという点においてであろう。従つて、核を巡る科学者、政治家を始めとする一人一人の些細なエピソードが本作では重要となる。何故、科学者らは重要局面でその行動に出たのか。誰と誰が会話をし、何が取引されたのか。何故、恐怖は生まれたのか。原子力開発に関与した全ての人々の選択的行動を詳細に追うバゴットの方法論

によって、恐怖が誕生した所以は有効的に明らかにされている。原爆は神の為せる業などではなく、人間の手によって生み出されたものであるというバゴットの立場は、冷戦と相互確証破壊の顛末を描いたエピソードでとりわけ強調される。バゴットは、核分裂の発見やプルトニウムの発見といった科学的事実自体の道徳性を否定した上で、全ての罪は如何なる場合においても人間の側にあり、人間は自らの愚かさに責任の所在を見出さなくてはならないという鋭い主張を展開する。

科学的事実とは、まさにその性質上、道徳とは無関係だ。道徳的な意味においては、正しくもないし誤りでもないし、善でもなければ悪でもない。石や木と同じように、単なる存在なのだ。(中略)言うまでもなく、道徳的な意味において、正しかったり誤っていたりするのとは人間、善いのも悪いのも人間なのだ。(五四二、強調は引用者による)。

核兵器・原子力を巡る欧米の支配的文脈が、終末的思想に徹することでもはや解決策の見えない限界点に突き当たっているのだとすれば、バゴットはこの限界を乗り越えるべく、二一世紀に生きる私達に向けて、核と向き合う上での重要な視座を提供していると言えるのかもしれない。最終章においてバゴットは、スペイン生まれの哲学者であり作家でもあるジョージ・サンタヤーナの「過去を思い出せない者は、それを繰り返す運命にある」という言葉を引用した上で、一連の物語を次のように締めくくっている。

地球規模の破壊の脅威は減ったかもしれないが、(爆弾)によって呼び起こされた恐怖の影に怯えて暮らし続けていると、歴史の教訓は、実に簡単に忘れ去られてしまう。(五八〇)

原爆投下から七〇年を経た時代に生きる私達にとって、「歴史の教訓」とはあまりにも耳に馴染み深い言い回しとなってきたかもしれない。それでもやはり、原爆は人間が生み出した罪であるという根本的な「事実」であることを反芻しない限り、原爆は再び人知を超えた力として、虚構化してしまうだろう。

## 注

1 事実上の執筆者はマンハッタン計画唯一のスポークスマンであったウイリアム・L・ローレンスであるとされる。本声明文は一九四五年八月七日付ニューヨークタイムズに掲載された。一面見出しは *First Atomic Bomb Dropped On Japan; Missile Is Equated To 20,000 Tons Of TNT; Truman Warns Foe Of 'Rain of Ruin'*。「史上初の原子爆弾日本に投下——破壊力は2万トンのTNTに相当 トルーマン大統領、日本に対し『破壊の雨』を勧告」。

2 Spencer R. Weart, *The Rise of Nuclear Fear* (Massachusetts: Harvard University Press, 2012).

3 ロバート・A・ジェイコブズ『ドラゴン・テール 核の安全神話とアメリカの大衆文化』(凱風社、二〇一三年)

(青柳千子訳 二〇一五年三月二一日 作品社 六三二頁 三八〇〇円+税)